

# 山と博物館

第18巻

第6号

1973年6月25日

大町山岳博物館



木崎湖でフ化したコブハクチョウ

撮影 西 沢 要

## 誕生を祝う

三月三十一日付で大町市教育委員会教育長を仰せつかり、したがって山岳博物館のことにも関係させていただくことになりました。

日本では唯一の特色ある山岳博物館であり創立以来二十一年間には、カモシカ・雷鳥・高山植物・登山などについての研究も深まりこれらの展示物も豊富になり、観覧者も多くなつてきております。この間の協議会委員をはじめ関係者の並々ならぬご協力と、ご尽力に心から感謝するものであります。

なお、今後山岳博物館の発展のため関係者及び市民各位のご助言とご支援をいただいでできるだけの努力をいたしたいと存じますので、何分よろしくお願い申し上げます。

五月二十六日にカモシカの赤ちゃんが生まれたというので、三十日誕生祝に出かけ父親の大助、母親のあつ子に第四子誕生を祝い、生後五日目の赤ちゃんにお目にかかりました。赤ちゃんは母の胎内に七カ月いたといいますが、両親から離れて、木の下の崖道をひとり散歩していました。

かわいい目をぱつちりとあけて、こちらに敬意を表するかのごとくでありました。

五月二十四日から二十五日にかけて、コブハクチョウのひなが生まれたというので、三十日右に引き続いて、夏期大学下の木崎湖畔の入江にハクチョウを訪ねました。父鳥は人の近づくのを警戒して人に危害を加える心配があり、海ノ口に隔離されておりましたが、母鳥のまわりにかわいいひな鳥が五羽泳いでいました。ひな鳥は母親の腹の下に三十七日間いたそうですが、生後五・六日で、泳ぎながら「うめばちも」(俗称グンダレ)をじょうずに食べていました。

人間の赤ちゃんと違って、かわいいお目々のカモシカが、生れながらに崖を歩き、かわいいうぶ毛のハクチョウが生れながら「も」を食することに、私は改めて目をみはり考えました。人間は教えられて初めて一人前になる動物であると。(大町市教育長 宮下正治)

# 安曇平の帰化植物

高橋 秀男

人間の活動に伴って自生地から分布を他の地域へ拡大している植物を渡来地で帰化植物と呼んでいる。帰化植物の侵入経路は様々で人間が何らかの目的で意図的に輸入する場合とそうでない場合がある。前者は食用、牧用、肥料、薬用、觀賞用などに利用するため輸入したもので繁殖力や生活力が強く、これがエスケープして帰化植物となったものである。一方後者は輸入品にまぎれ込んだり人間の往来や荷物の梱包材料に付着してきたものなどで、大部分が密入国と考えられる。したがって人間生活に対して役立つものは少なくその侵入経路も不明である。

ひとたび侵入又は輸入の機会を得た外来植物は先ず港、飛行場、工場内、鉄道構内、牧草地、牧場、耕作地、各種試験場、動・植物園などで発芽し(一次帰化)、その土地に適応したものは路傍、荒蕪地、耕作地、鉄道沿線、海岸、川原、伐採地などへ進出、伝播していく(二次帰化)。今でも横浜港へ諸外国から輸入されてくる牧草や緑化用種子には沢山の帰化植物となり得る要素をもった雑草種子が混入されてきているし、輸入羊毛にも沢山の外国の雑草種子が付着してきているのを私は観察している。

最近の都会地の雑草をみると九〇%以上が帰化植物で占められ、その除去に手をやく一方、一部の種類は人体に危害を及ぼす、いわゆる「公害雑草」として一躍社会問題にまで発展してきた。ブタクサ、クワモドキ、セイタカアワダチソウなどがそれで、花粉病を起すことで恐れられている。

安曇平の帰化植物をみると都会地に比較す

るとまだまだ少ない方で、花粉病の原因となる種類も大群落を成していない。私が一九六九年にこの地域のフロラをまとめたときの記録では七十四種であり、その後確認した種類を加えても八〇種にみたない。同じ年に松本市とその周辺を調査された浅川富雄氏は一〇七種を報告している。私のデータは市街地(特に工場敷地内)の調査に若干の盲点はあるが、まだ松本市よりは少ないようである。

安曇平の帰化植物は大部分が全国的に広く分布する種類で構成され、その特徴を見出すことはできない。また過去にフロラの記録も皆無で、帰化植物の侵入経路やその年代の追求も容易でない。

主な帰化植物を生育環境別にみると、田園地帯はシロツメクサ、アカツメクサ、カモガヤ、オオアワガエリ、ハルガヤ、シラゲガヤなど牧草の逸出した種類が大部分を占め、畑・休耕田などはノボロギク、ヒメジヨオン、ヒメムカシヨモギ、オオイヌノフグリ、オランダミミナグサなどが優勢である。都市部の路傍、空地、川辺、墓地などはヒメスイバ、ムシトリナデシコ、マメグンバイナズナ、アメリカセンダングサ、セイヨウタンポポ、ブタクサ、ナガハグサなどが見られ、山地、川原、伐採地にはオオマツヨイグサ、メマツヨイグサ、ダンドボロギクなどが目立っている。

さて次に安曇平に代表的な帰化植物について簡単な解説を試みる。

**ヒメスイバ** 墓地、芝地、路傍、川原など主として砂地に生える小形のスイバで、地下茎で増える厄介な雑草である。安曇平全域に普通に見られる。

**ホソアオゲイトウ** 花穂は細長く延び、全体の高さ二米にも達し群生する。高瀬川の川原と昭和電工付近に見られる。

**ムシトリナデシコ** 俗にオハカグサと言われるほど墓地に多いのは砂地を好むためである。ムシトリナデシコ、ハエトリナデシコの名は、茎の上部に粘液を分泌して虫を捕えるからついたものである。安曇平の各地に普通の帰化植物で、ときに觀賞用に栽植している。

**マメグンバイナズナ** ナズナが畑に多いのに対し、本種は都市部に多く、開花期もナズナに遅れる。安曇平の市街地に普通である。

**オランダガラシ** 水辺に群生し、五月に白色の四弁花を開く。安曇平では神城、北城、中土の姫川沿いや農具川の水辺に見られる。無性繁殖する強い植物で水田やせぎに入り込み、川の流れを止める害草となっている所もある。

**ピロイドクサフジ** 花は紫紅色、クサフジに似ているが、全体にピロイド状の毛に被われる。リングの緑肥に植えたものが逃げ出し繁茂するに至ったものである。大町市、白馬村など各地の路傍、田の畦に見かける。

**シロツメクサ** 原産地のヨーロッパでは比較的高地に自生しており、寒さに強い植物で南アルプスでは三伏峠(二七五〇米)に達し

お花畑に高山植物と混生している。北アではまだ高山には見ないが、やがて登山者の増加に伴って、美しいお花畑の破壊者ともなりかねない植物である。

**オオマツヨイグサ・メマツヨイグサ** 花は夏、夕刻に開き、翌朝しぼんでしまう一日花。花弁は長さ約四厘、果実は二種位となる。山地では白馬村猿倉、鏡川入扇沢、高瀬川入湯俣付近まで侵入している。これに似て花は小形(花弁は一・二・五厘、果実は二・三厘)



オオマツヨイグサ

のメマツヨイグサも原野、川原、路傍などに群生している。

**ワスレナグサ** 英名は *Forget me not*。花は淡青色、花序の先はまいてる。湿地を好み、田の溝、小川の縁などに群生し、平、大町、社、常盤、松川などの水田に見られる。ノハラムラサキ ワスレナグサに似るが、がく筒にかぎ形の曲った毛が著しい。一九五三年六月に下川頼人氏が大町で採集した。

**ヒメオドリコソウ** 関東地方では畑に普通の雑草となっているが安曇平ではまだ少ない高瀬川入(水害前に採集)、神城に少数ではあるが見られる。

が小さく花梗が短かいのが特徴。ともに沢山の種子をつくり、種子の発芽力も強い。各地の畑、田の畦などに普通。

**ノジシャ** 高瀬川の水害以前に仏崎から第二発電所間の右岸で採集した。

**アレチウリ** 最近長野市に帰化が報告されたが、大町市では社で十年ほど前に採集されている。つる性の植物で、葉は浅く5裂し果実に柔らかい刺がある。

**トゲチシャ** 茎及び葉裏脈上に刺があるが全体はサラダに用いるチシャに似ている。長野県では善光寺平、松本平、伊那谷などに特に旺盛を極めている。最近大町市の東洋紡付近に広がり始めた。

**ブタクサ** 大町市内の川辺に群生しているのを見かけるが、それほど多くはない。クワモドキは伊那谷や松本平の川原に群生しているのを見ているが、安曇平へはまだ侵入してきていない。

**ダンドボロギク** 山地の伐採地や路傍に大群落を見かける。

**オオアワダチソウ** 葉は三脈があり、表面は無毛、花穂はぎんぐりして短かく、花枝は下を向き、花期は六〜八月である。大町、常盤、美麻などに局部的に見られるが、まだそれほど多くはない。セイタカアワダチソウはまだ見えていない。

**セイヨウタンポポ** 総苞外片がそり返っているのが在来のエゾタンポポとは容易に識別できる。本種は結実率が高く、一株あたりの頭花数も一頭花あたりの小花数も在来のタンポポより多く、著しい種子の生産力が在来のタンポポを凌いで増えている原因の一つといわれている。大町市内にはまだ本種は散見される程度である。

**ヒメムカシヨモギ** 明治時代に鉄道線路の開通に伴って広がったところから鉄道草の異名がある。近頃休耕田に群生している。ヒメジョオンとともに安曇平の代表的な帰化植物といってもよい。

**ヒメジョオン** 自然の破壊の進んでいる八方尾根では標高二〇〇〇米に達し、お花畑の領域をおかしている。各地に普通であるが、特に休耕田に多い。

**アメリカセンダングサ** 果実に二本の刺があり、これが動物や人の衣服に着生して散布されてゆく。湿地に生え、農具川、姫川、高瀬川、大町市内の小川の縁に群生している。

**シラゲガヤ** 全体にピロウド状の毛が密にあり、田の畦、小川の縁などに群生している。山地では高瀬川入湯俣付近の湿地で採集したハルガヤ 路傍、田の畦などに群生し、乾かすと強い芳香がある。スプリング・グラスの名で牧草に輸入したもので国内各地に逸出拡まった。常盤、松川、大町の田園地帯に見

られる。

**セイバンモロコシ** 葉の形はススキに、花はモロコシに似る。地下茎で増え、除去に厄介な雑草である。大町市内の空地、路傍に見られるがまだ少ない。

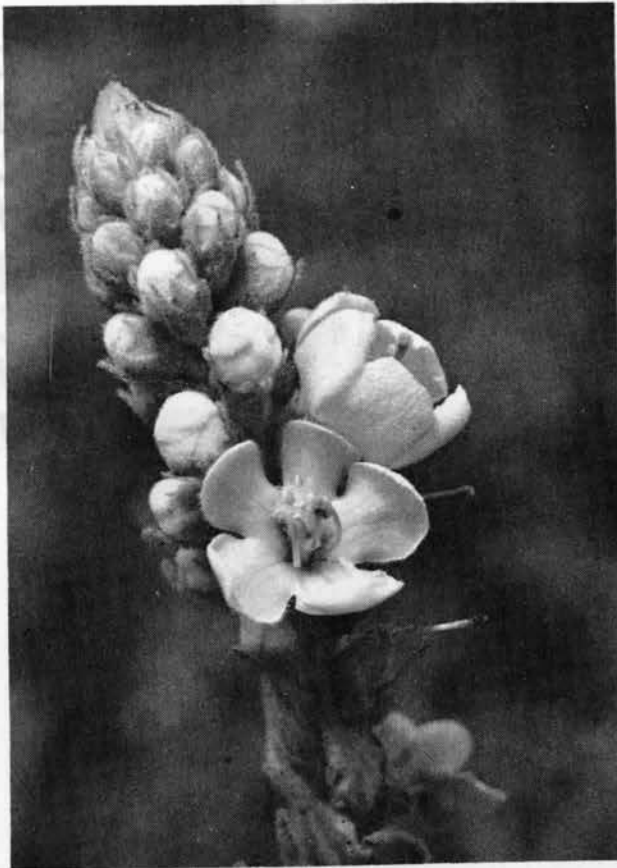
**カモガヤ** オークチャードグラスの名で牧草に輸入したものである。田の畦、原野、路傍に普通に見られる。

**オオアワガエリ** チモシーグラスの名で輸入したもので国内に普遍的に分布する帰化植物である。路傍、田の畦などに普通に見られる。(神奈川県立博物館)

### 博物館だより

去る五月二十六日午後、山岳博物館のカモシカ園でカモシカの赤ちゃんが生まれました。大助とあつ子の間に生れたもので、第四子です。まだ性別はわかりませんが、親子ともども元気です。これで現在博物館で飼育しているカモシカは十頭になりました。

また、海の口、白鳥の池、所属のコブハクチョウが、木崎湖の稲尾地籍で巣を作り、水田を作っている方々の暖かいご支援で五羽のヒナがかえり、元気に湖を泳いでいます。



ピロウドモウズイカ



生後3日目の親子



